

三省堂版準拠

明解 国語総合

【改訂版】

学習課題ノート



ご採用
見本
ダイジェスト
版

明解 国語総合〔改訂版〕学習課題ノート

目次

※ダイジェスト版には、★の教材を収録していません

現代文

1 随想一	ベトナムのコーヒー屋 負け方を習得する	角田光代 内田樹
2 小説一	とんかつ オムライス	三浦哲郎 宮下奈都
3 詩	シリウス シジミ	石津ちひろ 石垣りん
4 評論一	校庭で 魚は陸から離れられない	小野十三郎 松浦啓一
5 随想二	ツゴイネルワイゼン	黒柳徹子
6 小説二	バスに乗って なめとこ山の熊	重松清 宮沢賢治
7 短歌・俳句	遠い片手 短歌九首 麦わら帽子のへこみ 春のオルガン 俳句十二句	穂村弘
8 評論二	★水の東西	山崎正和 堀井秀之
9 随想三	問題解決の心理学 豊かな仕事言葉 「発見」最初は気づかない	小関智弘 福岡伸一
10 小説三	★羅生門	芥川龍之介
11 評論三	届く言葉、届かない言葉	鷲田清一

古文

1 古文入門	古文の世界へ ★児のそら寝（宇治拾遺物語） ★是非違使忠明（宇治拾遺物語）	14
2 随筆	★徒然草 公世の二位のせうとに 高名の木登り 丹波に出雲といふ所あり 枕草子 五月ばかりなどに にくきもの 方丈記 ゆく河の流れ 伊勢物語 芥川筒 井筒	16
3 物語		
4 和歌	うたう心 万葉集・古今和歌集・新古今和歌集	
5 軍記	平家物語 木曾の最期	
漢文		
1 漢文入門	★漢文の世界へ・故事成語 ★虎の威を借る 蛇足	18
2 漢詩	漢詩の世界	
3 語録	論語の言葉 学問・生き方・人との関わり 史話を読む 「三国志」の人々 蓋頭上題合字・前有大梅林	
4 史話	訓読のきまり 死諸葛走生仲達	

評論

水の東西

教科書 P.137 ~ P.143
山崎正和

目標

- 二つの水の姿を捉え、文化の違いについて考えを深める。
- 対比的表現に着目して、筆者の考えを読み取る。

検印

漢字・語句を確認しよう

■ 次の——線部の漢字は読みを、片仮名は漢字を書きなさい。

- ① 文化を紹介 [] する。
- ② 素朴 [] な音色。
- ③ 音と音との間隔 [] 。
- ④ 水が噴 [] き上げる。
- ⑤ 花を添 [] える。
- ⑥ 池を掘 [] る。
- ⑦ 大阪 [] の街を歩く。
- ⑧ 表情に乏 [] しい。
- ⑨ 粘土 [] をこねる。

- ⑩ 名画を鑑賞 [] する。
- ⑪ シーソーのイッタン [] 。
- ⑫ ぐらりとカタム [] く。
- ⑬ 水受けがハ [] ね上がる。
- ⑭ いつまでもク [] り返す。
- ⑮ 趣向をコ [] らす。
- ⑯ ぎっしりと埋めツ [] くす。
- ⑰ まるでチョウコク [] のようだ。
- ⑱ 公園の中にタキ [] がある。
- ⑲ 西洋の空気はカワ [] いている。
- ⑳ 父のコウイ [] は立派だった。

■ 次の県名を漢字で書きなさい。

- ① シズオカ []
- ② サイトマ []
- ③ ヤマナシ []
- ④ ギフ []
- ⑤ カゴシマ []

■ 次の□に漢字一字を入れて、上の熟語の対義語を完成させなさい。

- ① 往信 [] 信
- ② 主観 [] 観
- ③ 受動 [] 動
- ④ 需要 [] 給
- ⑤ 消費 [] 産

■ 次のそれぞれの文で、——線部の語句の使い方として正しいほうを選び、記号で答えなさい。

- ① a くぐもった声で聞き取りにくい。
b にわか に西の空がくぐもった。
- ② a 前人未踏の極致 を探検する。
b 美の極致 をきわめた宮殿。

■ 次の語句を使って、短文を作りなさい。

① 徒勞

② 林立

① 徒勞

□

② 林立

□

全体の構成を確認しよう

■ 次の空欄に、本文中の語句を補い、それぞれの内容をまとめなさい。

<p>「鹿おどし」のリズム (初め〜138・4)</p>	<p>「鹿おどし」の動き</p> <p>↓ 水がたまる＝緊張の高まり</p> <p>↓ 水がこぼれる＝緊張の解放</p> <p>のくり返し…</p> <p>何事も起こらない徒勞</p>
<p>「噴水」と「鹿おどし」の違いから浮かび上がる「日本人独特の感性」 (138・5〜141・3)</p>	<p>西洋人＝「噴水」を好む。</p> <p>↓ 水は粘土のような</p> <p>↓ 西洋人と違った独特の好み。</p> <p>↓ 形なきものを</p> <p>↓ 日本人＝伝統の中に「噴水」は少ない。</p> <p>↓ 水は</p> <p>↓ 西洋人と違った独特の好み。</p> <p>↓ 形なきものを</p> <p>↓ 姿が美しい。</p>
<p>「鹿おどし」とは何か (141・4〜終わり)</p>	<p>「鹿おどし」＝断続する</p> <p>↓ 日本人による水の鑑賞の極致を表す仕掛け。</p>

文章の理解を深めよう

「水の東西」の中で、「鹿おどし」と「噴水」のように、対比されている語句・表現を探して [] で囲み、それぞれ線でつなごう。

教科書137ページ〜138ページ4行目で説明されているものの特徴を捉えよう。

1 ここでは何について説明しているか。四字で抜き出しなさい。

[]

2 「鹿おどし」のどんなところに「人生のけだるさのようなもの」(137・1)を感じるのか。適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

↓道しるべ2

- ア 単純で緩やかな、徒労ともいえる動きの繰り返しであるところ。
- イ 緊張が高まったりほぐれたり、緩急のある動きをするところ。
- ウ 自然の、ありふれたものの組み合わせであるところ。
- エ 水がたまたまなければ、竹のシーソーが動かないところ。

[]

3 ①「緊張が高まりながら」(137・3)、②「緊張が一気にとけて」(137・4)とはそれぞれ、竹のシーソーがどのような状態にある時か。次の空欄にあてはまる語句を本文中から抜き出しなさい。

② 西洋では①は、風景の中でどのような位置を担っているか。本文中から二字で抜き出しなさい。

[]

2 「エステ家の別荘」(139・2)の庭の噴水を、筆者は何にたとえているのか。本文中から十字で抜き出しなさい。

[]

3 ①「時間的な水」(139・11)、②「空間的な水」(139・11)とはどのような意味か。次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

↓道しるべ4

- ア 人に、無限の時間の流れを感じさせる水。
- イ 長い歴史の中で、大切にされ続けてきた水。
- ウ 自然のまま、人の手を加えていない水。
- エ 彫刻のような質感で、空間に位置を占める水。
- オ 規模が大きく、人工の技術の高さを示す水。

[]

4 「日本の伝統の中に噴水というものは少ない」(139・12)理由について筆者の考えを端的に述べた一文を抜き出し、初めの五字を記しなさい。

[]

5 「そういう思想はむしろ思想以前の感性によって裏づけられている」(141・1)について、次の問いに答えなさい。

↓道しるべ5

① 「そういう思想」とはどのような考えか。次の文の空欄にあてはまる漢字二字の語句を考えて答えなさい。

① 竹の [] の一端についている []

[] に、水が [] 時。

② シーソーが [] 時。

4 「鹿おどし」の動きを端的に表現した部分を二十八字で抜き出し、初めと終わりの五字ずつを記しなさい(句読点も一字に数えます)。

[]

5 「それ」(138・1)が指しているものを、本文中から五字で抜き出しなさい。

↓道しるべ3

[]

6 「鹿おどし」という仕掛けによって何が表現されているか。本文中から十二字で抜き出しなさい。

[]

教科書138ページ5行目〜141ページ3行目で説明されている、二つのものの対比と、そこから浮かび上がる日本人の感性を捉えよう。

1 「鹿おどし」と対比的に取りあげられているものについて、次の問いに答えなさい。

① 何が取りあげられているか。本文中から二字で抜き出しなさい。

↓道しるべ1

[]

何事も [] があるがまがよい。

② 「思想以前の感性」とあるが、ここでは何か。本文中から十六字で抜き出しなさい(句読点も一字に数えます)。

[]

教科書141ページ4行目〜終わりで説明されている、「鹿おどし」についての筆者の考えを捉えよう。

1 「鹿おどし」は、日本人が水を鑑賞する行為の極致を表す仕掛けだといえるかもしれない(141・7)理由を次のように説明した。空欄にあてはまる語句を本文中から抜き出しなさい。

↓道しるべ6

水は [] が美しいと考える日本人が水を実感するのには、水を見るよりも、 []

[] を聞いて [] を感じるといふ「鹿おどし」の仕掛けこそがふさわしいから。

学びを広げる

日本人と西洋人が感じる、水の美しさの違いについて、「流れ(流れる)」「造型」という言葉を使いながら簡潔に説明しなさい。

小説

羅生門

教科書 P.172 ~ P.187
芥川龍之介

目標

- 追いつめられた状況の中での、人間の考え方や心の動きについて考える。
- 場面の推移や比喩表現に注意しながら、主人公の心理の移り変わりを捉える。

検印

漢字・語句を確認しよう

■ 次の——線部の漢字は読みを、片仮名は漢字を書きなさい。

- ① 塗りが剝 [] げる。
- ② 雨風の憂 [] えがない。
- ③ わら草履 [] を脱ぐ。
- ④ 濁 [] った黄色い光。
- ⑤ 暫時 [] 呼吸も忘れる。
- ⑥ 木切れを板の間に挿 [] す。
- ⑦ 行く手を塞 [] ぐ。
- ⑧ 口汚く罵 [] る。
- ⑨ 嘲 [] るような声。

- ⑩ 椅子を蹴倒 [] す。
- ⑪ 仏具を打ちクダ [] く。
- ⑫ 石段にシリ [] を据える。
- ⑬ 羅生門のロウ [] の上。
- ⑭ タチ [] を腰に下げる。
- ⑮ 火の光の及ぶハンイ [] 。
- ⑯ ゴヘイ [] がある言い方。
- ⑰ オオマタ [] で歩み寄る。
- ⑱ 物音にオドロ [] く。
- ⑲ 両手にナワ [] をかける。
- ⑳ おれをウラ [] むまいな。

■ 次のA群とB群の漢字を組み合わせ、二字の熟語を六語作りなさい。

- A群 遠・侮・襟・嗅・夕・衰
B群 覚・闇・微・髪・蔑・慮
- [] [] []
[] [] []
[] [] []

■ 次の文の□に、()内の意味になるように、平仮名を一字ずつ入れなさい。

- ① 選んでいる [] はない。
(選んでいるひまはない)
- ② 慌て [] く。
(たいへん慌てる)
- ③ 途方に [] 。
(手段が尽きて迷う)

■ 次のそれぞれの文で、——線部の語句の使い方として正しいほうを選び、記号で答えなさい。

- ① a それと知れた知識を役立てる。
b 見なくても手触りで、それと知れた。
- ② a 無造作につかみ取る。
b 無造作な心配りをする。

■ 次の語句を使って、短文を作りなさい。とりとめもない

② 手荒い

全体の構成を理解しよう

■ 次の空欄に、本文中の語句を補い、それぞれの内容をまとめなさい。

羅生門の下で (初め〜177・4)	主人に ① [] を出された下人。 ↓ このままでは ② [] になるより外にしかたがない。 ↓ 積極的に ④ [] するだけの ⑤ [] が出ずにいた。	老婆 ・死骸の中にうずくまっていた。 ・死人の髪の毛を抜き始めた。	下人 ↑ 六分の ⑥ [] と四分の好奇心。 ⑦ [] が消え、激しい ⑧ [] に対する反感が強さを増す。
老婆との出会い (177・5〜180・8)	死人の髪を抜くことは ⑨ [] かもしれない。 しかし ② [] をしないためには ⑩ [] ことだ。	下人の心に、ある ⑤ [] が生まれてきた。 ↓ 「きっと、そうか。」 老婆の ⑪ [] を剥ぎ取り、夜の底へ駆け下りた。 ↓ 下人の行方は、誰も知らない。	下人の決意 (183・12〜終わり)

文章の理解を深めよう

教科書172ページ〜176ページ12行目の中から、物語の時代・季節・時刻がわかる言葉を探して [] で囲もう。

教科書172ページ〜176ページ12行目を読んで、物語の舞台となった時代や場所、登場する人物について考えよう。

道しるべ1

1 「羅生門」という作品が、どのような構成になっているのかを次のようにまとめた。空欄にあてはまる語句を、本文中から抜き出さない。

① 〇〇〇

・時代：「a [] 朝の下人」とあり、荒廃した都の様子から、その末期であるとわかる。

・季節：「b [] という虫の名、さらに「c [] が欲しいほどの寒さ」とあることから、晩秋であることがわかる。

・時刻：冒頭に「d [] とあり、さらに「e [] ともあるので、夕方から夜になろうとする時刻に、物語が始まっている。

京都の町が衰微している中、四、五日前に主人から [] を出され、さしあたり [] をどうにかしようと、途方にくれている状態。

4 「どうにもならないことを、どうにかするためには、手段を選んでいるいとまはない。」(175・15) について、次の問いに答えなさい。

① 下人が最後にたどりついた「手段」は、どのようなものだったか。次の空欄にあてはまる語句を、本文中から五字で抜き出さない。

② ①の手段を選ぶことに踏み切れないのは、下人に何が欠けているからか。本文中から二字で抜き出さない。

教科書176ページ13行目〜182ページ3行目を読んで、それぞれの場面での下人の心理の変化について考えよう。

教科書177ページ5行目〜181ページ14行目の中から、「恐怖」「好奇心」「憎悪」「悪」という語句を探して [] で囲もう。

② どこで [] の [] 大路にある [] の下と楼上。

③ 誰が [] 主人公は下人で、ある主人に [] 使われていた。右の頬に [] があることから、年齢は十代後半くらいだと思われる。

2 当時、羅生門はどのような状態となっていたか。次の空欄にあてはまる語句を、本文中から抜き出さない。

3 羅生門の下に腰を下ろしている下人は、どのような状態にあるか。次の空欄にあてはまる語句を、本文中から抜き出さない。

1 「そのはしごのいちばん下の段へ踏みかけた。」(177・3) とあるが、下人はなぜ、楼に登ろうと思ったのか。次の空欄にあてはまる語句を、本文中から抜き出さない。

2 「二人の男」(177・6) 「その男」(177・7) とあるが、ここで下人を「二人の男」「その男」と言いかえている理由として適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

3 「息を殺しながら、上の様子をうかがっていた。」(177・6) とあるが、下人はなぜそのように警戒しているのか。次の空欄にあてはまる語句を、本文中から抜き出さない。

楼の上にいるのは [] ばかりだとたかをくくっていた

が、そこで ^② をとぼしている、 ^③ では

4 「楼の内をのぞいてみた」(178・1) 下人は、床の上に転がっている死人を見て、どのようなものだと感じたか。次の空欄にあてはまる語句を、本文中から十字で抜き出しなさい。

5 「初めて、その死骸の中にうずくまっていた人間を見た」(178・14) 時の下人の心理を表した語句を、本文中から十二字で抜き出しなさい。

6 老婆が死体の「髪の毛を一本ずつ抜き始めた」(179・8) のを見た下人の心理について、次の問いに答えなさい。

① 下人の気持ちは、まずどのように変化したか。次の空欄にあてはまる語句を、本文中から抜き出しなさい。
 が少しずつ消えていった。

② なぜそうなったのか。理由として適切なものを次の中から選び、

- ア 「悪」を見据えることで、「善」を呼び起こしたい気持ち。
- イ 「悪」を憎むことで、恐怖心を克服したい気持ち。
- ウ 何が「悪」で何が「善」なのかを、理屈で理解したい気持ち。
- エ 老婆の「悪」を責めることで、自分を正当化したい気持ち。

9 「下人は、老婆を突き放すと、いきなり、太刀の鞘さやを払って、白い銅の色を、その目の前へ突きつけた。」(181・6) について、次の問いに答えなさい。

① 「白い銅の色を、その目の前へ突きつけた」という表現と同じ種類の表現技法を用いているものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 友人と一緒に、ごはんを食べに出かけた。
- イ 今の彼の心は、激しく燃える炎である。
- ウ 少女の頬は、まるで磨いた陶磁器のようだった。
- エ 春風に吹かれて、木々が楽しげに騒いでいる。

② この時の下人の心を占めていた内容として適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 老婆を問いただす立場に身を置いた優越感。
- イ 老婆の行為の善悪を確かめようとする探求心。
- ウ 老婆を驚かせてやろうという子どもっぽいいたづら心。
- エ 老婆に腕力で負けてはいられないという対抗意識。

↓道しるべ2

↓道しるべ2

↓道しるべ2

記号で答えなさい。

- ア 老婆が自分に危害を加えそうもなかったから。
- イ 老婆が何をしているかが具体的にわかったから。
- ウ 老婆が狐狸きりや盗人ではないとわかったから。
- エ 老婆が自分には何の関心も示さなかったから。

③ ①の変化とともに、下人の心にはどのような感情がわき起こったか。次の空欄にあてはまる語句を、本文中から抜き出しなさい。

この老婆に対する激しい ^a、というよりもむしろ、
 ^b に対する反感が強さを増してきた。

7 「この男の悪を憎む心は、老婆の床に挿した松の木切れのように、勢いよく燃え上がりだしていたのである。」(179・15) とあるが、このような感情の動きの背景にあるものは何だと考えられるか。次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 下人自身もまた、盗人になるしかないという状況。
- イ いったんは老婆に対して、恐怖心を抱いたという経験。
- ウ 猿のような老婆の醜い外見。
- エ 死体の髪の毛を抜くという、理由のわからない行為。

8 老婆の行為を「許すべからざる悪であった」(180・6) と決めつけたことの裏には、下人のどのような気持ちがあったと考えられるか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

10 「そうしてこの意識は、今まで険しく燃えていた憎悪の心を、いつの間にか冷ましてしまった。」(181・10) について、次の問いに答えなさい。

① 「この意識」とはどのような意識のことか。次の空欄にあてはまる語句を、本文中から抜き出しなさい。

自分の意志が老婆の ^a を ^b していると意識。

② 下人の「憎悪の心」がこのように冷めた理由として適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 下人には老婆を憎む理由が見つからなかったから。
- イ 老婆の生死を支配したことで満足したから。
- ウ 老婆が屈服し、自分の行為を反省したから。
- エ 下人の心に老婆に対する同情が生まれたから。

教科書182ページ4行目〜183ページ11行目を読んで、老婆の弁明と、それに対する下人の心の動きについて考えよう。

1 「かつらにしようと思うた」(182・9) という老婆の答えを聞いた下人は、まずどう思ったか。次の空欄にあてはまる語句を本文中から抜き出しなさい。

老婆の答えが、予想外に ^① であつたため、それまで抱いていた好奇心を満たされず、 ^② した。

2 老婆の答えを聞いた下人が「冷やかな侮蔑」(182・11)を感じたのはなぜか。その時の下人の気持ちとして適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分と同じ人間でも、これほどの悪に染まることがあるのか。
- イ いかにも現実的な考え方で、反論のしようがない。
- ウ 自分が考えもしなかった方法で、生き抜いている人間がいる。
- エ この老婆もまた、自分と同じ状況にある人間にすぎなかった。

3 老婆は「死人の髪の毛を抜く」(182・15)という自分の行為をどのように正当化しているか。次の空欄にあてはまる語句を本文中から抜き出しなさい。

↓道しるべ3

羅生門の楼の上にいる死人は、みな髪の毛を抜かれるくらいのこととをされても ①

に見てくれるような「悪」に染まった

人間ばかりだ。また、自分の行為は「悪」に違いないとしても、それをしなければ ②

をするのだからしかたがない。

まず確認! 教科書177ページ〜182ページの中に出てくる、動物を使った比喩表現に線を引こう。

エ 敏捷で生命力を感じさせるイメージ。

 ① ②

【五】教科書183ページ12行目〜185ページを読んで、最後に下人がどのような考えに至ったかについて考えよう。

1 「下人の心には、ある勇気が生まれてきた。」(183・15)とあるが、それはどのような勇気か。適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

↓道しるべ5

- ア 生きるためには手段を選ばないと決意する勇気。
- イ 老婆よりも強く生きてやろうとする勇気。
- ウ 飢え死にをいとわないで生きるという勇気。
- エ 老婆のことは見逃してやろうとする勇気。

2 「きつと、そうか。」(184・6)とあるが、下人は何を確かめようとしたのか。適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 老婆が語った具体例の真偽。
- イ 生き延びるためには多少の悪は許されるという老婆の論理。
- ウ 他人に危害を及ぼしてもかまわないという老婆の弁明。
- エ 死人の髪の毛を抜く老婆の本当の目的。

3 「夜の底」(184・15)という表現は、どのようなことを象徴していると思われるか。適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 下人がこれから生きる、たくましくおおらかな世界。

【四】教科書177ページ5行目〜182ページ14行目を読んで、動物を使った比喩表現が表すものについて考えよう。

↓道しるべ4

1 下人の行動に対して用いられている動物を使った比喩表現を、教科書177ページから二つ、出てくる順に指定字数で抜き出し、それぞれの最初の三字を記しなさい。

 ①十字 ②十三字

2 老婆の行動や様子に対して用いられている動物を使った比喩表現を、教科書178ページから182ページの中から六つ、出てくる順に指定字数で抜き出し、それぞれの最初の三字を記しなさい。

①七字	<input type="checkbox"/>	②十七字	<input type="checkbox"/>
③十六字	<input type="checkbox"/>	④二十一字	<input type="checkbox"/>
⑤十字	<input type="checkbox"/>	⑥十字	<input type="checkbox"/>

3 ①下人をたとえた動物と、②老婆をたとえた動物が連想させる内容にあてはまるものを次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ア 人間に近い賢さを感じさせるイメージ。
- イ おびえたイメージや緊張感。
- ウ 不快なイメージや弱肉強食の世界。

- イ 未来には飢え死にしかない、暗くて恐ろしい世界。
- ウ もちつもたれつの人間関係が支配する世界。
- エ 下人がこれから生きるはずの過酷で混沌とした世界。

学びを広げる

①「この老婆を捕らえた時の勇気」(184・1)、②「全然、反対な方向に動こうとする勇気」(184・2)とあるが、それぞれの勇気の違いについて、「悪」という言葉を使って説明しなさい。

② 下人は、羅生門で老婆と出会うことによって、社会に対してどのような見方をもつようになったと思われるか。説明しなさい。

古文入門

児のそら寝

宇治拾遺物語

教科書 P212 P215

目標

● 歴史的仮名遣いに注意しながら音読し、児と僧たちの思いを読み取る。

検印

語句・文法を理解しよう

【一】 次の——線部の読みを現代仮名遣いの平仮名で書きなさい。

- ① 児のそら寝
- ② 寝たる由
- ③ 待ちみたる
- ④ ひとこゑ
- ⑤ をさなき人

【二】 次の——線部の語句の本文中の意味として適切なものをそれぞれあとから選び、記号で答えなさい。

- ① おどろかせたまへ。(213・上3)
- ア 驚いてくださいませ
- イ 目をお覚ましなさいませ
- ウ お気づきなさい

② ただ一度にいらへむも、(213・上4)

- ア 返事をするのも
- イ 起き上がるのも
- ウ 食べてしまうのも
- ③ 念じて寝たるほどに、(214・上2)
- ア 思い込んで
- イ 祈って
- ウ じっと我慢して
- ④ あな、わびしと思ひて、(214・上6)
- ア 困った
- イ 憎らしい
- ウ もの悲しい

【三】 次の——線部を、現代仮名遣いに直して全て平仮名で書きなさい。

- ① かいもちひせむ。(212・上3)
- ② 「ただ一度にいらへむも、」(213・上4)
- ③ 「待ちけるかともぞ思ふ」(214・上1)
- ④ 「念じて寝たる」(214・上2)

- ② もの申しさぶらはむ、(213・上3)
- ③ 一度にいらへむ(213・上4)
- ④ 食ひに食ふ音(214・上8)

【四】 次の() に省略されている助詞をあと【 】の中から選び、書きなさい。

↓古文のとびらー

僧たち () ()、よひのつれづれに、「ごぞ、かいもちひ () () せむ。」と言ひけるを、この児 () ()、心寄せに聞きけり。【 は が も を と 】

文章の理解を深めよう

【一】 「この児、心寄せに聞きけり。」(212・上4)とあるが、児は何と聞いたのか。本文中から抜き出しなさい。

【二】 児は【一】を聞いて、どのように思い、何をしたか。次の「」にあってはまる語句を、現代語訳中から抜き出しなさい。

ぼた餅のできあがりを、いかにも待っているかのように起きてゐるのも、①「」

て、部屋の片隅で②「」

【一】 をした。

【三】 「待ちあたるに、」(213・上2)とあるが、児が待ちながら心の中で思っていたことを、本文中から十三字で抜き出しなさい。

【四】 次の——線部の主語は、ア児、イ僧たち、のどちらか。それぞれ記号で答えなさい。

- ① 「うれしと思へども」(213・上4)

検印

【五】 現代語訳の「お起こし申しあげるな」(214・下5)にあたる部分を、本文中から抜き出しなさい。

【六】 「ひしひし」(214・上8)とは、何の音か。本文中から六字で抜き出しなさい。

【七】 「僧たち笑ふこと限りなし。」(214・上11)とあるが、僧たちはなぜ笑ったのか。適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 児が、寝言を言ったと思ったから。
- イ 児が、夢の中で返事をしたと思ったから。
- ウ 「えい。」という声、突拍子もなかったから。
- エ 児が寝たふりをしていたとわかって、滑稽だったから。

徒然草 公世の二位のせうと

教科書 P222 ↓ P223

目標

●できごとの原因や経過とその結果をたどりながら、周囲の人々の反応と主人公像を読み取る。

検印

語句・文法を理解しよう

■ 次の——線部の読みを現代仮名遣いの平仮名で書きなさい。

- ① せうと
- ② 僧正
- ③ きはめて
- ④ 悪しき
- ⑤ 傍ら
- ⑥ 切りくひ

① 良覚僧正と聞こえしは、(222・1)
ア 覚えている方

■ 次の——線部の語句の本文中の意味として適切なものをそれぞれあとから選び、記号で答えなさい。

- イ 申しあげた方
- ウ 評判になった方
- ② きはめて腹悪しき人なりけり。(222・1)
ア 怒りっぽい人
- イ 腹黒い人
- ウ みにくい人
- ③ この名しかるべからず。(222・4)
ア さしつかえない
- イ 立派だ
- ウ よくない

■ 次の——線部の動詞の a 終止形、b 活用
の種類を答えなさい。
↓古文のとびら

- ① かの木を切られにけり。(222・4)
a 「 [] b 「 []
活用 []
- ② 掘り捨てたりければ、(223・1)
a 「 [] b 「 []
活用 []

■ 次の——線部の語句の a 品詞名、b ここの活用形を答えなさい。
↓古文のとびら

- ① きはめて腹悪しき人(222・1)
a 「 [] b 「 [] 形
- ② 腹立ちて、(223・1)
a 「 [] b 「 [] 形
- ③ 大きなる堀にて(223・1)
a 「 [] b 「 [] 形

■ 次の各文の助動詞「けり」の活用形を答えなさい。
↓古文のとびら

- ① 「榎えの木の僧正」とぞ言ひける。(222・3)
「 [] 形
- ② かの木を切られにけり。(222・4)
「 [] 形
- ③ その根のありければ、(222・5)
「 [] 形

文章の理解を深めよう

■ 「公世の二位」と「良覚僧正」とはどのような関係か。二字で答えなさい。

[]

■ 「かの木」(222・4)とは、何を指しているか。本文中から七字で抜き出しなさい。

[]

■ 「いよいよ腹立ちて、」(222・5)とあるが誰が腹を立てたのか。次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 公世の二位
- イ 良覚僧正
- ウ 人
- エ 榎の木

■ 良覚僧正の人柄を表している部分を本文中から十字以内で抜き出しなさい。

[]

■ 良覚僧正の呼び名はどう変わったか。順に書きなさい。

[]

■ 人々はどうのような気持ちから良覚僧正にあだ名をつけたと考えられるか。適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 何事にも怒りっぽい僧正に親しみをもちながからかう気持ち。
- イ 何事にも怒りっぽい僧正を嫌いたしなめる気持ち。
- ウ 何事にも気難しい僧正に何とか喜んでもらおうという気持ち。
- エ 何事にも真剣に取り組む僧正を深く尊敬する気持ち。

[]

■ この話のおもしろさはどういう点にあるか。次の中から適切なものを二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 僧の最高位にある良覚僧正が、身分の低い者に次々にやりこめられる点。
- イ 世俗せぞくのことに超越したはずの僧正が、あだ名をつけられたくらいでむきになる点。
- ウ 人々が、最高位にある良覚僧正に、あえてふさわしくないあだ名を考えている点。
- エ 僧の最高位にある僧正と庶民が、どちらが機知に富んでいるか競い合う点。
- オ 僧の最高位である僧正に、庶民が次から次へとあだ名をつけていく点。

[]

道しるべ

漢文入門

漢文の世界へ・故事成語

教科書 P.265~P.271

目標

● 何度も繰り返し音読して、漢文の読み方について理解する。

検印

漢文の基本的な用語を確認しよう

■ 次の空欄 A～E に入る適切な語句をあとから選び、記号で答えなさい。

● 「百聞不如一見」のような中国の文章を日本語として読むために、昔の日本人々は読む順序を示す記号である A や、句読点、B を付けた。この工夫を C 法と呼ぶ。この方法に従って、「百聞は一見に如かず」のように日本語の文章として書き改めたものを D という。

● 「矛盾」「蛇足」など、昔あったできごとや言い伝えがもとになって生まれた言葉は E といわれる。

ア 書き下し文 イ 故事成語
ウ 訓読 エ 返り点 オ 送り仮名

D A
E B
C

語句・句法を理解しよう

■ 次の語句の故事成語の中での意味を、現代語訳から抜き出さない。

① 備_レ 「_レ」
② 患_レ 「_レ」
③ 行_カ 「_カ」

■ 次の文は「千里之行始_レ於_二足_一下_三」(269・6) についての説明である。空欄にあてはまる語句を補いなさい。

「之」は日本語の助詞にあたるので、書き下すときには「_①」と平仮名で書く。また、「始_レ於_二足_一下_三」の部分を書き下すときは、「_②」は置き字なので読まない。

次の故事成語を書き下し文にしなさい。

① 大器_ハ、晩成_ス。
② 有_レ備_ハ、無_シ患_ハ。
③ 歲月_ハ不_レ待_タ人_ヲ。
④ 千里之行始_レ於_二足_一下_三。
⑤ 青_ハ取_リ之_ヲ於_二藍_一而_シ青_シ於_二藍_一。
⑥ 不_レ入_二虎_一穴_ニ、不_レ得_二虎_一子_ヲ。

↓道_シる_ハ一

文章の理解を深めよう

■ 「大器は、晩成す。」(268・1)は何をたとえた故事成語か。次の文の空欄にあてはまる語句を、aは三字、bは二字で現代語訳から抜き出さない。

a b
は大成するのに がかかること。

■ 「歲月は人を待たず。」(269・1)について、次の問いに答えなさい。

① これは何をたとえた故事成語か。次の空欄にあてはまる語句を現代語訳から六字で抜き出さない。

あとで悔やんでも 。

② 「歲月は人を待たず。」と同じような意味をもつ故事成語を、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 光陰矢のごとし イ 背水の陣
ウ 君子危うきに近寄らず エ 温故知新

■ 「千里の行も足下より始まる。」(269・5)について、次の問いに答えなさい。

① 「千里の行」の意味を現代語訳中から五字で抜き出さない。

② 「千里の行も足下より始まる。」は何をたとえた故事成語か。次の空欄にあてはまる語句を現代語訳中から六字で抜き出さない。

どんなことでも から始まること。

■ 「青は之を藍より取りて藍より青し。」(270・1)について、次の問いに答えなさい。

① A「青」とB「藍」は、何のたとえになっているか。それぞれ二字で、現代語訳中から抜き出さない。

A B

② より青いのは、「青」と「藍」のどちらか。漢字で答えなさい。

■ 「虎穴に入らずんば、虎子を得ず。」(270・5)について、次の問いに答えなさい。

① 「虎穴」とはどういう場所のことか。次の空欄に入る二字の語句を答えなさい。

非常に な場所

② 「虎子を得ず」とあるが、「虎子を得る」とは何をたとえたものか。次の空欄にあてはまる語句を現代語訳中から二字で抜き出さない。

を立てること

漢文入門

虎の威を借る

教科書 P.272 P.273

目標 ● 何度も音読し、「虎の威を借る」の意味について理解を深める。

検印

語句・句法を理解しよう

① 次の語句の読み方を、送り仮名を含めて、現代仮名遣いで、全て平仮名で書きなさい。

- ① 子 (273・下3) []
- ② 以_テ (273・下6) []
- ③ 故_ニ (273・下9) []

② 次の語句の本文中での意味を次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ① 使_{シム} [A] [B] (273・下4)
 - ア AにBさせる
 - イ AにBされる
- ② 命 (273・下5)
 - ア 将来 イ 命令
 - ウ 言葉 エ 生命

全体の構成を理解しよう

① 次の空欄に、本文中の語句を補い、内容をまとめなさい。

- ③ 吾 (273・下6)
 - ア おまえ イ 誰
 - ウ あなた エ 私
- ④ 然_リ (273・下9)
 - ア なるほど イ 何だ
 - ウ どうか エ いやだ
- ⑤ 遂_ニ (273・下9)
 - ア しかし イ なぜか
 - ウ まったく エ そのまま

③ 次の故事成語を書き下し文にしなさい。

- ① 無_{カレ}敢_{ヘテ}食_{ラフ}我_{コト}也_ヲ (273・下3)
- ② 使_{シム}我_{コト}長_{カラ}百_{ヒヤク}獸_{シヨウニ} (273・下4)
- ③ 為_レ畏_セ鼠_ノ也_ヲ 狐_{ナリ}也_ヲ (273・下12)

【虎の威を借る】

① []に捕まえられた② []が、巧妙な策略を用いてピンチを逃れることができた。

↓ ①の威を借る ②「 」という、故事成語のもとになっている。

文章の理解を深めよう

① 「虎百獸を求めて之を食らふ。」(272・上1)とあるが、「之」とは何を指しているか。書き下し文の中から二字で抜き出さなさい。

[]

② 「子敢へて我を食らふこと無かれ。」(272・上3)について、次の問いに答えなさい。

- ① 次の空欄にあてはまる語句を補い、現代語訳を完成させなさい。
あなたは [] 私を食べては []
- ② 「子」とは、誰を指しているか。書き下し文の中から一語で抜き出さなさい。
[]

③ 狐は、このように言う根拠をどのように説明しているか。次の空欄にあてはまる語句を、aは二字、bは一字で書き下し文の中から抜き出さなさい。

自分 []
自分 []
自分 []
自分 []
自分 []
自分 []

自分 []
自分 []
自分 []
自分 []
自分 []
自分 []

自分 []
自分 []
自分 []
自分 []
自分 []
自分 []

自分 []
自分 []
自分 []
自分 []
自分 []
自分 []

④ 「獸之を見て皆走る」(273・上10)について、次の問いに答えなさい。

虎の威を借る

全体の構成を理解しよう

① 次の空欄に、本文中の語句を補い、内容をまとめなさい。

① []に捕まえられた② []が、巧妙な策略を用いてピンチを逃れることができた。

↓ ①の威を借る ②「 」という、故事成語のもとになっている。

① 「之を見て」とあるが、動物たちはどんな様子を見たのか。適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 狐が虎に追いかけられている様子。
- イ 狐の背後を虎が歩いている様子。
- ウ 王である狐が虎を従えて歩いている様子。
- エ 虎が狐に襲いかかろうとしている様子。

② 動物たちはなぜ逃げていったのか。次の空欄にあてはまる語句を、それぞれ漢字一字で書きなさい。

① []と② []の事を畏れたから。

③ 動物たちが逃げていったことについて、虎はどのように考えたか。虎の考えを示している部分を、273ページの漢文の中から漢字五字で抜き出さなさい。

[]

④ 「虎の威を借る」という話から「虎の威を借る狐」という故事成語が生まれた。この「虎の威を借る狐」という故事成語は、現在どのような意味で用いられているか。次の中から適切なもの一つを選び、記号で答えなさい。

- ア ものごとを必要以上に大げさに考えること。
- イ 強い者の力に頼って弱い者がいばること。
- ウ 害や災いをもたらすものを野放ししておくこと。
- エ 人物の評価を名誉や功績によって判断すること。

解答

漢字・語句を確認しよう

- ① ① しようかい ② そぼく ③ かんかく
- ④ ふ ⑤ そ ⑥ ほ ⑦ おおさか ⑧ とほ
- ⑨ ねんど ⑩ かんしょう ⑪ 一端 ⑫ 傾
- ⑬ 跳 ⑭ 繰 ⑮ 凝 ⑯ 尽 ⑰ 彫刻 ⑱ 滝
- ⑲ 乾 ⑳ 行爲

- ① 静岡 ② 埼玉 ③ 山梨 ④ 岐阜 ⑤ 鹿児島
- ① 返 ② 客 ③ 能 ④ 供 ⑤ 生
- ① a ② b

⑤ (例) 努力が徒勞に終わる。

② (例) 湾岸の工業地帯に煙突が林立する。

全体の構成を理解しよう

- ① 流れるもの ② 人生
- ③ 造型 ④ 空間 ⑤ 自然に流れる
- ⑥ 恐れない ⑦ 音の響き

文章の理解を深めよう

学步確認

- 「流れる水」⇄「噴き上げる水」(138・13)
- 「時間的な水」⇄「空間的な水」(139・11)
- 「自然に流れる」⇄「圧縮したりねじ曲げたり、粘土のように造型する」(140・10/140・11)
- 「見えない水」⇄「目に見える水」(141・4)
- 「見る」⇄「音の響きを聞いて、その間隙に流れるものを間接に心で味わえばよい」(141・6)

① 鹿おどし

によって考えていく文章である。「鹿おどし」が、水の流れを、音という目に見えないものによって感じる仕掛けであるのに対して、噴水は風景の中心に、造型のような水を置くものである。「鹿おどし」の中には、見えないものを恐れない日本人の心があり、水は自然に流れる姿が美しいとする美意識がある。

文章の理解を深めよう

- ① 文章の冒頭に「付で示されている「鹿おどし」が、この文章の話題の中心である。
- ② 「けだるい」は、何となくだるい意味。鹿おどしの動きは単純で緩やかなリズムの、無限の繰り返しであるために、見ているこちらは退屈である。さらに、せっかくなかった水がこぼれ、また水をためるといふ、何のためにもならない動きであることを「徒勞」(137・8)と表現していることに着目する。

③ 鹿おどしの動きを思い描きながら考える。それぞれの直前の部分に着目。「寛の水が少しずつたまる」⇄「緊張が高まりながら」「ぐらりと傾いて水をこぼす」⇄「緊張が一気にとけて」となる。

④ 鹿おどしの動きとは、水受けに水が少しずつたまり、いっぱいになると傾いて水がこぼれ、音がするだけの動きの繰り返しである。水受けがいっぱいになるまでの長い時間や同じ動きがいつまでも繰り返される様子を「単純な、緩やかなリズムが、無限にいつまでも繰り返される」(137・7)と表現されている。

⑤ 指示語の指す内容はまず、前から探すが鉄則。ここでは直前の「流れるもの」を指す。指

2 A

- ③ ① a シーン b 水受け c 少しずつたまる
- ② d 傾いて水をこぼす
- ④ 単純な、緩く返される。
- ⑤ 流れるもの
- ⑥ 流れてやまないものの存在

- ① 噴水
- ② 中心
- ③ 揺れ動くバロック彫刻
- ④ 日本人にと
- ⑤ ① (例) 自然

③ 積極的に、形なきものを恐れない心

- ① ① 自然に流れる姿 ② 音の響き
- ③ 流れ

学びを広げる

① (例) 日本人は水が自然に流れる姿を美しいと感じるが、西洋人は水を造型することで美を見いだそうとする。

解説

漢字・語句を確認しよう

- ① 「紹」を、同音で形の似た「招」や「昭」と区別する。
- ⑤ 「添」の音読みはテン。
- ⑥ 「才(てへ

示語の指すものが見つかったら、それを指示語に代入して意味が通るかを確認する。

⑥ 「この仕掛け」(138・2) が鹿おどしを指すことを押さえると、鹿おどしが「流れてやまないものの存在を強調」(138・3) する仕掛けになっている、という内容が捉えられる。

② 「ニューヨークの大きな銀行の待合室」で

見た二つのものを捉える。一つは鹿おどしであり、もう一つは噴水である。鹿おどしが当地の人々の心にならなっていないように見えたのに対して、噴水は「明らかに人々の気持ちをくつろがせていた」(138・12)と、対照的に見えている。

② 噴水についての考察は「そういえばヨーロッパでも……静止しているように見えた。」の段落に述べられている。ここでは、西洋における噴水は、「風景の中心」であり、「壮大な水の造型」のようなもので、水が「空間に静止しているように見えた」とある。鹿おどしが、「流れるものを感じさせる」(138・1)のに対して、水が止まって、その存在を印象付けるものになっているのである。

② 「彫刻さながら」(139・8) に着目。噴水の水の動きは感じられず、彫刻のようにどっしりそこにあるものに見えるというのである。

④ 「だが、人工的な滝を作った日本人が、噴水を作らなかつた理由は、そういう外面的な事情ばかりではなかつたように思われる。」(140・7)のあとに着目。日本人は、水が自然にある姿を美しいと思う感性をもっているために、上

ん)の「掘」は「ほ・る」。「才(つちへん)の「堀」は「ほり」と読む。⑧「まず・しい(貧しい)」ではない。⑪「一端」⇄端の一方。⑬「跳」の「兆」の部分が音の「チヨウ」を表す。⑮形の似た「疑」や「擬」と区別する。⑲「乾」の右側の「乙」は一画で書く。⑳「為」の部首は「灬(れつか・れんが)」。

② 「埼」を「崎」と区別する。

① 「信」は「手紙・たより」の意味をもつ。「返信用の葉書」などと使う。

② 「主観」⇄自分なりの見方。「客観」⇄誰もが認める見方。

③ 「受動」⇄他からはたらきかけられること。「能動」⇄自分からはたらきかけること。

④ 「需要」と「供給」を合わせた「需給」という熟語があり、「需給のバランスが悪い」などと使う。

⑤ 「消費」⇄使ってなくなること。「生産」⇄作って生み出すこと。

④ 「くぐもる」は声などがこもって、はつきり聞こえないこと。また、その様子を表す言葉。

② 「極致」は到達しうる最高の境地、おもむき、という意味。同音異義語の「極地」「局地」に注意する。

① 「徒勞」⇄無駄な努力。

② 「林立」とは、林の中の木のように、たくさん立っている様子。林そのものには使わない。

全体の構成を理解しよう

この評論は日本独特の「鹿おどし」の仕組みやその効果について、西洋によくみられる噴水との対比

から下へ流れる自然な動きは作っても、下から上へ人工的に噴き上げさせることはしなかつたという考えである。

⑤ ① 「行雲流水」に表れた、自然がよい、ありのままがよいという考え方である。前の「水は自然に流れる姿が美しい」(140・10)にも通じている。

② 「積極的に、形なきものを恐れない心」(141・

3)とは、形が定まらないものの存在があるがままに受け入れつつ、日本人なりの美しさや親しみを見いだす心のこと。

③ 最終段落に着目。ここでは、鹿おどしは日本人が水を感じるのに、最適な仕掛けであるという考えを述べている。「形なきものを恐れない心」をもつ日本人は、水を「流れるもの」として捉える。言いかえれば、水が流れていると感じられれば、水の存在を実感できるということである。鹿おどしは繰り返しされる音の響きで「流れてやまないものの存在を強調している」(138・3) 仕掛けであるから、日本人が水を感じるのにふさわしいのである。

学びを広げる

本文では、

- ・ 水は自然に流れる姿が美しいと考える日本人

- ・ 造型を加えて美を見いだす西洋人

ということが対比されていた。「鹿おどし」「噴水」は、そのような水に対する捉え方の違いを具体的に述べるために用いられている。両者の違いを整理しつつ、「流れ(流れる)」「造型」という言葉を有効に使ってまとめよう。

解答

漢字・語句を確認しよう

- 一 ①は ②うれ ③ぞうり ④にご ⑤ざんじ
- ⑥さ ⑦ふさ ⑧ののし ⑨あざけ
- ⑩けたお ⑪砕 ⑫尻 ⑬楼 ⑭太刀
- ⑮範囲 ⑯語弊 ⑰大股 ⑱驚 ⑲縄 ⑳恨
- 二 遠慮・侮蔑・襟髪・嗅覚・夕闇・衰微
- 三 ①いとま ②ふため ③くれる
- 四 ①b ②a
- 五 ①(例) とりとめもない話がえんえんと続く。
- ②(例) 食器を手荒く扱ってはいけない。

全文の構成を理解しよう

- 一 ①暇 ②飢え死に ③盗人 ④肯定 ⑤勇氣
- ⑥恐怖 ⑦憎悪 ⑧悪 ⑨悪いこと
- ⑩しかたがない ⑪着物

文章の理解を深めよう

まず確認しよう

- 時代：市女笠(172・4)／採烏帽子(172・4)／平安朝の下人(175・6)
- 季節：きりぎりす(172・3)／火桶(176・10)
- 時刻：暮れ方(172・1)／刻限が遅い(174・9)／申の刻下がりから降りだした雨(175・7)／夕闇はしだいに(175・12)
- 一 ①a 平安 b ぎりぎりす c 火桶 d 暮れ方 e 夕闇 ②f 京都 g 朱雀 h 羅生門 ③i 永年 j 大きなきび

- 2 ①修理 ②死人 ③からす
- 3 ①暇 ②明日の暮らし
- 4 ①盗人になる(こと) ②勇氣

二

まず確認しよう

- 「恐怖」：179・4／179・9
- 「好奇心」：179・4
- 「憎悪」：179・10／181・11
- 「悪」：179・12／179・15／180・6
- 1 ①雨風 ②人目 ③夜を明かそう
- 2 ウ
- 3 ①死人 ②火 ③ただの者
- 4 土をこねて造った人形
- 5 六分の恐怖と四分の好奇心
- 6 ①恐怖 ②イ
- ③a 憎悪 b 悪

- 3 ①大目 ②飢え死に

三

- 1 ①平凡 ②失望
- 2 工
- 3 ①大目 ②飢え死に

四

- 10 ①a 生死 b 支配 ②イ
- 9 ①ア ②ア
- 8 工
- 7 ア

五

- ①「とりとめもない」の「とりとめ」は、「まとも」という意味。「とりとめもない」で、まともがなく、いつまでも終わらない様子を表す。
- ②「手荒い」は、動作や扱い方が荒々しい、という意味。

解説

漢字・語句を確認しよう

- 一 ①「剝」の音読みは「ハク」。「剝奪」「剝離」などの熟語で使われる。②「憂え」は「憂い」と同じ。ここでは「心配」という意味。④「濁」の音読みは「ダク」。「汚濁」「濁流」などの熟語で使われる。⑥「挿」の「さ(す)」は、あるものを他のもの間にさしはさむ、という意味。「挿し絵」なども使われる。音読みは「ソウ」。「挿入」「挿画」などの熟語で使われる。⑦「塞」の音読みは「ソク」。「閉塞」などの熟語に使われる。⑯「縄をかける」は、本文中では、罪人を捕まえる、という意味。⑳「恨」の音読みは「コン」。「怨恨」などの熟語で使われる。
- 二 「侮蔑」は、あなどってさげすむこと、という意味。「襟髪」は、首の後ろの髪、という意味。「嗅覚」は、においに反応する感覚、という意味。「衰微」は、勢いがおとろえて弱くなること、という意味。
- 三 ①「いとま」は、ひま、時間の余裕、という意味。②「慌てふためく」は、うろたえて大あわてをする様子を表す言葉。③「途方」は、手段・方法。「く(暮)れる」は、暗くなる、という意味。合わせて「途方にくれる」で、どうすればいいのかわからない状態を表す。
- 四 ①「それが何なのかわかった」という意味が自然につながるbが正解。②「無造作」は、慎重に構えずにたやすく行う様子、という意味。bのようには使わない。

全文の構成を理解しよう

「羅生門の下で」(172～177・4) 平安時代末期のある日の暮れ方のこと。人影のない羅生門の下で、五日前に主人に暇を出された下人が雨やみを待ちながら、どうにもならない明日の生活を思いつて途方にくれていた。

「老婆との出会い」(177・5～180・8) ともなくそこの夜を明かそうと、羅生門の楼を上った下人は、そこで死人の毛を抜いている醜い老婆を目撃する。

「老婆の弁明」(180・9～183・11) 下人は老婆を取り押さえて、その行為の意味を問いたたす。老婆は、死人の髪を抜いてかつらにするのだ、と答える。それは、生きるためにしかたなくしたことだ、と弁明する。

「下人の決意」(183・12～185) 「きつと、そうか。」と念を押すと、下人は老婆の着物を剥ぎ取って、夜の闇の中へ逃走した。

文章の理解を深めよう

- 一 1 まず、は、いつ、どこで、誰がという、小説の基本設定をおさえよう。①季節：きりぎりすは秋の季節になっている虫。また、「もう火桶が欲しいほど、寒さ」(176・10)という表現からも、まだ冬ではないというニュアンスが読み取れる。時刻：「申の刻」は、午後四時頃。

まず確認しよう

猫のように身を縮めて(177・6) やもりのように足音を盗んで(177・14) 猿のような老婆(178・15) 猿の親が猿の子のしらみを取るように(179・7) 鶏の脚のような、骨と皮ばかりの腕(181・3) まぶたの赤くなった、肉食鳥のような、鋭い目(182・5)

からすの鳴くような声(182・8) 暮のつぶやくような声(182・13)

四

- 1 ①猫のよ ②やもり
- 2 ①猿のよ ②猿の親 ③鶏の脚
- ④まぶた ⑤からす ⑥暮のつ
- 3 ①イ ②ウ

五

- 1 ア
- 2 イ
- 3 工

学びを広げよう

一 (例) ①は、あらゆる「悪」に対する反感が強まり、目の前で許すべからざる悪事を行う老婆に向かっていく勇氣である。一方、②は、手段を選ばず生きぬくために、盗人になる「悪」を積極的に肯定する勇氣である。

二 (例) 飢え死にから逃れるために、悪事をはたらかなければならないほど、下人の暮らす平安朝の社会は荒れはてた厳しいものであるという見方。

2 洛中(都の中)は、本来は敬うべきであるはずの仏像や仏具を打ち砕いて売るほどさびれていた。都の外れにあるために、それに輪をかけて荒れ果てていた羅生門の様子を読み取る。

3 下人の様子については、174ページ11行目から176ページにかけて述べられている。「暇を出される」とは、解雇されること。右の頬の「にきびを気にしながら」(174・13)という表現から、下人の若さと、やることなく暇をもてあましている様子、なかなか決心がつけられない優柔不断な性格がうかがえる。

4 ①「どうにもならないこと」は、「明日の暮らし」のことを述べた表現。下人が暇を出されたのは、京の都が荒廃して経済的に衰えたからだ。この状況では、まっとうな生活の手段を探す希望もない。176ページ6行目には、「どうにもならないこと」について考えをめぐらせた下人は、「盗人になるより外にしかたがない。」ということを、積極的に肯定するだけの、勇氣が出ずにいた」と書かれている。この部分から読み取ろう。②「積極的に肯定するだけの、勇氣が出ずにいた」という部分から、欠けているものは「勇氣」だと読み取れる。

二 1 「雨風の憂えない」(176・14)とは、雨に降られ風に吹かれる心配がない、という意味。下人は、とりあえず雨風から身を守る仮のねぐらにしようとして、楼に上ったのである。 2 下人を見る視点を、映画のカメラを置く場所を変えて捉え直したかのような表現。最初は

「一人の男」が誰だかわからないが、「にきびのある頬である」(177・8)という描写を読めば、先ほどの下人であることに気づくだろう。作者はいったん客観的な描写に切り替えて、羅生門の情景の一つとして男を見つめ、「一人の男」↓「その男」↓「下人」と男の正体が明らかになることで、下人の心理に沿った描写へと移っている。ア・イ・エのように気分や時間・場所の変化はあるが、それを特に強調するための描写の工夫ではない。

3 「息を殺す」は、息をおさえてわずかな音も立てないようにする、という意味。当時の羅生門は、狐狸や盗人が棲み、死体が捨てられる不気味な場所だと考えられていた。そこで火をともしている者に気づいた下人は、「どうせただの者ではない」(177・13)と思っただけである。「やもりのように足音を盗んで」(177・14)、「体をできるだけ、平らにしなごら」(177・15)など、下人の恐怖心や警戒心を表す描写にも注目しよう。

4 死体がぼろぼろになって、「土をこねて造った人形のように」(178・7)なものに変化している様子を表した描写。

5 「六分の恐怖と四分の好奇心」(179・4)は、全体を十とすると六が恐怖で四が好奇心だった、という意味。怖いもの見たさで老婆の様子を見つめる、下人の心理を表した表現である。

6 ①老婆が死体の髪の毛を抜くのを見ていううちに、下人の心から、十のうち六分を占めていた恐怖心が消えていった。②楼の上で見つけた

相手を「ただの者ではない」と思った下人は、その相手を観察することで、「檜皮色の着物を着た、背の低い、痩せた、白髪頭の、猿のような老婆」(178・15)だと確認する。この時点で、自分に危害を加えるような狐狸や盗人ではないとわかったはずだ。さらに、老婆が死体の髪の毛を抜いていることを具体的に突きわめて、その行為がどんな意味をもつのかはわからないものの、正体のわからないものに対する恐怖が消えたのである。

7 直前で「さっき門の下でこの男が考えていた、飢え死にをするか盗人になるかという問題」(179・13)が、なぜ改めて取りあげられたのかを考えてみよう。男の頭の中には、常に「盗人になるより外にしかたがない」(176・6)状況に陥る危機感が染みついていたのである。「下人にとっては、この雨の夜に、この羅生門の上で、死人の髪の毛を抜くということ」が、それだけですでに許すべからざる悪」(180・5)であった。目の前で醜い老婆が、邪悪な行いにふける様子を見た下人は、自分もそうなるかもしれないという、受け入れたくない未来を見せつけられた気がして、「悪を憎む心」を「勢いよく燃え上がり」させたのである。イ・ウは老婆への憎悪とは直接関係が無い。エは「なぜ老婆が死人の髪の毛を抜くかわからなかった。したがって、合理的には、それを善悪のいずれに片づけてよいか知らなかった」(180・3)とあるように、明確な理屈で善悪を判定できないこととの関連で説明されている。むしろ、下人の

(5) 提喻：広い意味をもつ意味内容で、具体的な事物を表す表現。

例「白い鋼の色を、その目の前へ突きつけた」(181・6) ※「白い鋼の色」という広い意味をもつ意味内容で、太刀の切っ先という具体的なものを表している。

右で分類したように、「白い鋼の色」は、「提喻」の表現。アは同じく提喻、イは隠喩、ウは直喩、エは擬人法。

②下人は太刀の刃を突きつけながら、「何をしていた」と老婆を問いつめている。武器の力を借りて、老婆を尋問するかのよう迫る下人の姿と、その状況での心情を考える。

10 ①「この」は直前の、「この老婆の生死が、全然、自分の意志に支配されているということ意識した」という内容を指している。②老婆の生死を支配した優越感をもつことで、とりあえずの満足感を得た下人は、一時的な感情の高ぶりから生まれた「憎悪の心」を冷ましてしまったのである。

1 老婆の答えの直後に書かれた内容である。

2 それまで下人がいってきた「憎悪」は、感情的なものだった。「冷やかな侮蔑」とは、老婆の平凡な答えを聞いた下人の感情が冷めて、相手と自分の立場を客観視する余裕ができたことを示す表現である。

3 老婆の話の中に、「しかたがなく」という言葉が繰り返されていることに注目する。自分の行為がしかたのないことだと説明することで、正当化しているのである。

その相手を観察することで、「檜皮色の着物を着た、背の低い、痩せた、白髪頭の、猿のような老婆」(178・15)だと確認する。この時点で、自分に危害を加えるような狐狸や盗人ではないとわかったはずだ。さらに、老婆が死体の髪の毛を抜いていることを具体的に突きわめて、その行為がどんな意味をもつのかはわからないものの、正体のわからないものに対する恐怖が消えたのである。

4 1 下人が老婆と出会う前の動物を使った比喩表現は、下人がどのような様子だったのかを表すために使われている。

2 下人が老婆と出会うことで以降の動物を使った比喩表現は、下人が老婆に対してどのように感じたのかを表すために使われている。

3 ①は、下人がおびえて緊張している場面、②は、下人が老婆に対して、不快や冷酷さを感じている場面に使われていた比喩であることに着目する。

5 1 直後に「それ(＝ある勇氣)は、さっき門の下で、この男には欠けていた勇氣である」とある。門の下で、下人がどういう考えに至ったのか、176ページ5行目からの文を読み返してみよう。「盗人になるより外にしかたがない。」ということ、積極的に肯定するだけの、勇氣が出すにいた」とある。つまり、下人に欠けていたのは、生きるために手段を選ばず、盗人になる勇氣である。

2 「さっと、そうか」は、182ページ15行目からの老婆の弁明に対して、特に、悪事をはたらいでも「大目に見てくれるであろ」という最後の言葉に対して返された言葉である。

3 「夜の底」という言葉は、暗くて得体の知れない「悪」のイメージを感じさせるので、あてはまるのはイ・エである。下人はそこへ、老婆の着物を奪って、勢いよく駆け下りていったのだから、悪の世界に転落しても生き抜いてやろうというたかな意志が感じられる。あてはまるのはエである。

怒りは、合理的な善悪の判断ではなく、単なる感情の爆発でしかないことを読み取りたい。

8 前項で解説したように、下人は無意識に老婆の状況と、現在の自分の状況を重ねている。老婆の行為を「悪」だと決めつけて責めることで、自分はそのようにならない正しい心をもっていると、自身自身を正当化しているのである。

9 ①比喩表現には、次のような形がある。

(1) 直喩(明喩)：「〜のよう」などという形でたとえる表現。

例「ごまをまいたように、はつきり見えた」(174・7)

(2) 隠喩(暗喩)：「〜のよう」などの言葉を使わずにたとえる表現。

例「急なはしごを夜の底へ駆け下りた」(184・15) ※「夜の底」のような闇に包まれた

表)へ」と、「〜よう」が省略されている。

(3) 擬人法(活喩)：人でないものを人にととえる表現。

例「風は門の柱と柱との間を、夕闇とともに遠慮なく、吹き抜ける」(176・10) ※「風」に、人間のような意思があるかのように書かれた表現。

(4) 換喩：具体的な事物で、一般的な概念を代表させて表す表現。

例「雨やみをする市女笠や採烏帽子が、もう二、三人はありそうなのである」(172・4) ※「市女笠」と「採烏帽子」という言葉で、平安時代の一般的な女性と男性を表している。

学びを広げる

①「この老婆を捕らえた時の勇氣」については、179ページ9行目からの段落に説明されている。それまで下人は、「六分の恐怖と四分の好奇心」をいじめて「息をするのをさへ忘れて」老婆の様子を見守っていた。従って、この時点でまた「勇氣」はわいていない。ところが、老婆が死骸から髪を抜く様子を見るうちに、恐怖が少しずつ消え、「あらゆる悪に対する反感」が強さを増し、老婆に飛びかかっていく。つまり①の勇氣は、「悪」に対する反感から、老婆へ立ち向かう衝動の原因となるものであることがわかる。

②の勇氣は、「文章の理解を深めよう」の5-1で学習したとおり。門の下ではまだもつことのできなかった勇氣。つまり、手段を選ばずに生きるために、盗人になる「悪」に手を染めることを積極的に肯定する勇氣である。176ページ5〜8行目を、「悪」という言葉を使いながらまとめよう。

二 羅生門で出会った老婆は、特別な人物ではなく、平安朝の民衆社会を体現する存在として、その現実を直に伝える者である。したがって、老婆たちの生活が、下人が身をもって学んだ社会の現実であることをふまえてまとめよう。飢え死にかから逃れるために死人の髪を抜く老婆や、悪事を重ねて生涯を終えた死骸たちの生き様を見聞きし、下人は、自らが暮らす社会の混沌とした厳しい現実を知ることになるのである。

解答

語句・文法を理解しよう

①ちご ②よし ③まちいたる

④ひとこえ ⑤おさなき

⑥イ ⑦ア ⑧ウ ⑨ア

⑩かいもちい ⑪さぶらわん

⑫いらえん ⑬くいにくう

⑭(僧たち)がは

(かいもちひ)を

(この児)は・が

文章の理解を深めよう

①いざ、かいもちひせむ。

②きつとよくないだろう

③寝たふり

④さだめておどろかさむずらむ

⑤ア ⑥ア ⑦イ ⑧ア

⑨なごし奉りそ

⑩食ひに食ふ音

⑪工

解説

語句・文法を理解しよう

①「由」は、よく用いられている古語。ここでの

「寝たる由」は「寝たふり」という意味である。

②「おどろく」には現代語と同じ「びっくりす

解答

語句・文法を理解しよう

①「せうと」の「せう」は「シヨ」と読む。平

仮名表記なので「しょう」と書く。②歴史的仮名

遣いは「そうじやう」「やう」は「よう」となる。

③「きはめて」の「は」は単語の中にあるので

「わ」と読む。④「かたはら」の「は」も単語の

中にあるので「わ」と読む。⑤「切りくひ」の

「ひ」は文末にあるので「い」と読む。⑥

「聞こゆ」は謙譲語で、「申しあげる」の意。⑦

「腹悪し」は「怒りっぽい・意地が悪い」の意で、

ここは前者。⑧「しかるべし」は「適当である・

ふさわしい」などの意で、ここはその打消の形。

⑨「切ら」とア段の音が来るので、四段活用動詞

「切る」の未然形。同じ未然形がア段の音でも、ラ

行変格活用は「あり」「をり」など、終止形が

「り」で終わる語。直後の「れ」は尊敬の助動詞

「る」の連用形で、未然形に接続する。⑩「て・

て・つ・つる・つれ・てよ」と活用し、下二段活

用である。終止形を「掘り捨てる」としないよう

に。

⑪は終止形が「し」で終わるので形容詞。「人」

という体言に続くので連体形。⑫は終止形にする

と「腹立つ」と、ウ段の音で終わるので動詞。「て」

に続くので連用形。⑬は「堀」という名詞に続く

随筆

徒然草 公世の二位のせうとに

解答

語句・文法を理解しよう

①しょうと ②そうじやう

③きわめて ④あしき

⑤かたわら ⑥きりくい

⑦イ ⑧ア ⑨ウ

⑩a切る bラ行四段

⑪a掘り捨つ bタ行下二段

⑫a形容詞 b連体

⑬a動詞 b連用

⑭a形容動詞 b連体

⑮連体

⑯終止

⑰已然

文章の理解を深めよう

⑱兄弟

⑲大きな榎の木

⑳きはめて腹悪しき人

㉑榎の木の僧正

㉒切りくひの僧正

㉓堀池の僧正

㉔ア

㉕イ・オ(順不同)

解説

語句・文法を理解しよう

①「せうと」の「せう」は「シヨ」と読む。平

仮名表記なので「しょう」と書く。②歴史的仮名

遣いは「そうじやう」「やう」は「よう」となる。

③「きはめて」の「は」は単語の中にあるので

「わ」と読む。④「かたはら」の「は」も単語の

中にあるので「わ」と読む。⑤「切りくひ」の

「ひ」は文末にあるので「い」と読む。⑥

「聞こゆ」は謙譲語で、「申しあげる」の意。⑦

「腹悪し」は「怒りっぽい・意地が悪い」の意で、

ここは前者。⑧「しかるべし」は「適当である・

ふさわしい」などの意で、ここはその打消の形。

⑨「切ら」とア段の音が来るので、四段活用動詞

「切る」の未然形。同じ未然形がア段の音でも、ラ

行変格活用は「あり」「をり」など、終止形が

「り」で終わる語。直後の「れ」は尊敬の助動詞

「る」の連用形で、未然形に接続する。⑩「て・

て・つ・つる・つれ・てよ」と活用し、下二段活

用である。終止形を「掘り捨てる」としないよう

に。

⑪は終止形が「し」で終わるので形容詞。「人」

という体言に続くので連体形。⑫は終止形にする

と「腹立つ」と、ウ段の音で終わるので動詞。「て」

に続くので連用形。⑬は「堀」という名詞に続く

解答

語句・文法を理解しよう

①期待通り、一人の僧が「もの申しさぶらはむ、

おどろかせたまへ。」と起こしてくれたのを、児

は「うれしい」と思ったのである。②僧が起こし

てくれている言葉に「いらへむ」、すなわち「返

事をするの」は児である。③ここでの「思ふ」と

は、起こされるのを児が待っていたのかと「僧

たちが」思う」ということである。④「念じて寝

たる」とは、「(もう一度僧に呼ばれるまで、児

は)我慢して寝ている」ということである。

⑤「な……そ」で、「……するな」という禁止を表

す言い方であると覚えよう。「お起こし申しあげ

るな」にあたる部分だけを抜き出さなければなら

ないから、「や、なごし奉りそ。」と答えたなら、

不正解である。「や」は「おい」という意味で使

われている感動詞である。

⑥「ひしひし」は、「むしゃむしゃ」と盛んに食べ

ている様子を表す語である。「食ひに食ふ」とは、

「食べる」の意味を強めた言い方で、「しきりに食

べる」ことを表している。「走りに走る」「泣きに

泣く」などという表現と同様である。

⑦ 児は、はるか前の、僧の「もの申しさぶらはむ、

おどろかせたまへ。」という言葉に、「えい。」と

返事をしたのである。「えい。」と答えた瞬間に、

児が、僧に声をかけられた時からずっと「寝たふ

り」をしていたことが皆の知るところとなり、大

笑いをされる結果となったのである。結果的に、

児のぼた餅への執着心が際立つ形になってしま

ったのである。

ので連体形。「なり」で終わるのは、形容動詞の

「ナリ活用」。

⑤ 過去の助動詞「けり」はラ変型の活用をする。

①は、文末にあるが、係助詞「ぞ」の結びで、連

体形となっている。

文章の理解を深めよう

① 第一文は、この話の主人公「良覚僧正」の紹介

である。「せうと」は「兄弟」の意、「せうとに」

の「に」は、ここでは「…で」の意である。

② 「かの」は、話し手からも聞き手からも遠くのも

のを指す。指示語なので、前の文に着目する。

③ 「切りくひの僧正」と言われ、怒って「切りく

ひ」を掘り捨てたのは誰か。

④ 「いよいよ腹立ちて」に見られるような性格が、

どのように紹介されているか。

⑤ 「……ありければ、……」とぞ言ひける(と言

ひけり)という表現によって、呼ばれた原因と、

その結果つけられた呼び名が説明されるとい

パターンが三回繰り返されている。良覚僧正は本

名であるが、呼び名ではない。

⑥ 最初の「榎の木」は「はくく自然な呼び方。

しかし僧正が過剰に反応するので、おもしろがっ

て人々のほうも呼び名を変えていったのである。

そこには、高位にあり世俗(せぞく)のことは超越して

いる僧正のいかにも人間味のある姿を、おもし

ろがりからかかっている様子がうかがえる。

⑦ 『徒然草』の中には、ほかに、法師の失敗談や

滑稽(こぼけ)な話書かれている。筆者は、仏道修行をし

て達観(たつかん)している僧が見せる人間味ある姿

と、気楽な庶民の姿を対照的に描きだしている。

解答

漢文の基本的な用語を確認しよう

一 A工 B才 Cウ Dア Eイ

語句・句法を理解しよう

一 ①(ふだんの)準備 ②心配 ③旅

二 ①の ②於

三 ①大器は、晩成す。

②備へ有れば、患ひ無し。

③歳月は人を待たず。

④千里の行も足下より始まる。

⑤青は之を藍より取りて藍より青し。

⑥虎穴に入らずんば、虎子を得ず。

文章の理解を深めよう

一 a 大人物 b 時間

二 ①間に合わない ②ア

三 ①はるかな旅 ②身近なところ

四 ①A弟子 B師匠 ②青

五 ①(例) 危険 ②功名

解説

漢文の基本的な用語を確認しよう

一 ●「百聞不如一見」のように漢字だけで書かれた文を「白文」といい、白文に訓読のための記号を付けたもの(「百聞不如一見」)を「訓読文」、訓読文を漢字仮名交じりの日本語の文章として

書き改めたもの(「百聞は一見に如かず」)を「書き下し文」という。訓読文で左下に付いている記号が「返り点」、右下に添えられているのが「句読点」と「送り仮名」である。

●有名な故事成語には、他に「五十歩百歩」「完璧」などがある。あわせて覚えておこう。

語句・句法を理解しよう

一 ①は「そなえ」と読み、「(ふだんの)準備」の意。

②は「うれい」と読み、「心配」の意。ここでは、「無患」と「無」で打ち消されているので、「心配はない」という意味になっている。③は「こ

う」と読み、ここでは「旅」の意。

二 ①「之」はここでは「の」と読み、格助詞「の」

のはたらきをする。日本語の助詞や助動詞にあたる字は、書き下し文にするときは平仮名に直す。

②「於」は置き字。字自体は読まないが、起点を示す意味をもち、「足下」の送り仮名でそれを示している。

三 ①返り点が付いていないので、上から順に読んでいく。右下に添えられている送り仮名は、書き下すときには平仮名に直して書こう。②「レ点」は一字だけ上の字に返ることを示す返り点。「有備」は「備↓有」の順に、「無患」は「患↓無」の順に読む。③「レ点」が二つ付いている「不待人」の部分は、「人↓待↓不」の順に読む。④⑤二で見たように、置き字の「於」は読まない。

また、⑤は一・二点が二組あるが、上から順に読むので、「取之於藍」を読んだあと、「青於藍」を読む。⑥「不人虎穴」「不得虎子」の部分は、一点の付いた字、二点の付いた字、レ点の付いた字の順に読む。

文章の理解を深めよう

一 「大きな器」は「大人物」をたとえたもの。「晩成す」は、「すぐにはできあがらない」という意味。つまり、「時間がかかる」ということ。

二 ①「歳月は人を待たずに過ぎ去ってしまう」という意味。人を待ってくれないということから、「間に合わない」という意味になる。②「光陰矢のごとし」は、月日の流れるのは速いことのとえ。他の故事成語も覚えておこう。「背水の陣」は、失敗すればあとがない状況で、全力を尽くすこと。「君子危うきに近寄らず」は、賢い人間は危険なところには近寄らないということ。「温故知新」は、昔のことを学んで、新しい考え方や知識を得ること。「故きを温ねて新しきを知る」とも言う。

三 ①「千里」は、「はるかな」という意味。②「足下の一步」は「身近なところ」をたとえたもの。

四 ①「青」を弟子に、「藍」を師匠にたとえ、弟子が師匠よりも優れることをいう。②「青は」藍より青し」から読み取る。

五 ①「虎穴」とは、虎がすんでいる洞穴のこと。非常に危険な場所のたとえ。②「虎子を得ず」で、「功名を立てることはできない」という意味。

文章の理解を深めよう

一 「虎百獸を求めて之を食らふ。」は「虎は動物たちを探し求めてはこれを食べていた。」という意味。虎が食べていた「これ(之)」とは「動物たち(百獸)」である。

二 ①「敢へてAすること無かれ」は、「決してAするな」の意で禁止を表している。「敢へて」は「強いて」する、進んで「する」意、「無かれ」は「してはいけない」という禁止の意。

②「こは、狐が自分を捕まえた虎に対して「あなたは決して私を食べてはいけない。」と言っている場面である。

③直後の「天帝我をして百獸に長たらしむ。今、子我を食らばば、是れ天帝の命に逆らふなり。」の部分に根拠が述べられている。

三 ①直前までの内容に着目する。虎に捕まった狐は、自分は天帝から動物たちの王にされたので食べてはいけないというそをつく。そして虎は、自分の後ろについて来ればそれが本当であるとわかる、という狐の言葉に納得して、狐の後ろについて歩く。動物たちはその様子を見たのである。

②動物たちは、狐を見て逃げたのではなく、狐の背後を歩いている虎を畏れて逃げたのである。

③虎は、動物たちが逃げたのは自分を畏れているからだということに気づいていない。狐の言うとおり、狐の姿を見て逃げたのだと考えているのである。

四 「虎」は「強い者・有力者」、「狐」は「弱い者・小人」のたとえとして用いられている。

漢文入門

虎の威を借る

解答

語句・文法を理解しよう

一 ①し ②もって ③ゆえに

二 ①ア ②イ ③エ ④ア ⑤エ

三 ①敢へて我を食らふこと無かれ。

②我をして百獸に長たらしむ。

③狐を畏ると為すなり。

全体の構成を理解しよう

一 ①虎 ②狐

文章の理解を深めよう

一 百獸

二 ①a (例) 決して b (例) いけません

②虎 ③a 天帝 b 命

三 ①イ ②a 狐 b 虎 ③以為畏狐也

四 イ

解説

語句・句法を理解しよう

一 ①はここでは「し」と読み、「あなた」の意。相手に敬意を表す言い方となる。②は「もって」と読む。「Aを以てBと為す」で「AをBとする(みなす・思う)」の意味になる。③は「ゆえに」。ここでは「それで」の意。

二 ①「使A B」(AをしてB(せ)しむ)で、「AにBさせる」という使役を表す重要表現。②

「命」は「めい」と読み、「命令」のこと。ここでは、狐を動物たちの王にしたことを指す。③「吾」は「私」。ここでは狐を指す。④「然」は、ここでは「なるほど」と、相手の発言に納得する表現。

272・下3〜272・下8行目までの狐の言いのがれに同意しているのである。⑤「遂」は「そのまま、その結果」の意。

三 ①「レ点」に注意する。レ点の下の字を読んでから、上の字に戻る。従って「無敢食我」の部分には、「敢↓我↓食↓無」の順に読む。この「也」は置き字なので読まない。②一・二・三

点は、一点の付いた字↓二点の付いた字↓三点の付いた字、の順番に読む。「使」は「しむ」と読み、日本語の使役の助動詞「しむ」にあたるので、書き下し文では平仮名で書く。③「為畏狐」はレ点がつくので、下から上に「狐↓畏↓為」の順番で読む。「也」は助動詞なので、「なり」と平仮名で表記する。












全体の構成を理解しよう

「虎の威を借る」は、虎に捕まえられ、食べられそうになった狐が、虎をだますことで窮地を脱したという話である。「虎の威を借る狐」は、現在では、他の権勢に頼っていばる小人のたとえとして使われている。

明解 国語総合【改訂版】指導書・教材類のご案内

 =データまたは音声でのご提供です。  =冊子でのご提供です。

指導書

セットで同梱	指導資料	
	発問例集	
	ワークシート (学びの道しるべ、語句・漢字、本文語句、本文漢字、構成・内容理解、古文品詞分解、表現活動)	
	基本テスト	
	評価問題	
	補充教材	
	教科書原文	
	朗読 CD	
	漢文エディタ	
	学習課題ノート	
	教師用教科書	
	本体価格(予価)	¥24,000

※「発問例集」の内容は「指導資料」にも含まれています。

指導書別売品

教師用教科書	 ¥5,000
--------	---

※指導書セットの「教師用教科書」と内容は同じです。



指導資料 PDF 版	 ¥5,000
------------	---

※指導書セットの「指導資料」の紙面を PDF ファイルにしたものです。

生徒用教材(採用品)

学習課題ノート	 ¥600
---------	---

デジタルテキスト

指導者用デジタルテキスト	
学習者用デジタルテキスト	

※指導書・教材類は現在編集中のため、内容・仕様等については変更する場合があります。

※価格はいずれも本体価格(予価)です。

予価(本体600円+税)

三省堂

〒101-8371 東京都千代田区三崎町2-22-14
☎03-3230-9411(編集)・9412(営業)

大阪支社

〒530-0002 大阪市北区曽根崎新地2-5-3
☎06-6341-2177

名古屋支社

〒460-0008 名古屋市中区栄3-25-43 瑞穂ビル 4F
☎052-252-9211・9212

九州支社

〒810-0012 福岡市中央区白金1-3-1
☎092-531-1531・1532

札幌営業所

〒060-0042 札幌市中央区大通西15-2-1 ラスコム15ビル 3F
☎011-616-8722

三省堂版準拠

明解
国語総合
改訂版

学習課題ノート

ご採用
見本
ダイジェスト
版

年 組 番 氏名